

1 研究主題

主体的な聞き手を育てる学習指導方法の改善に関する研究 対話における系統的な学習活動を通して

<内容の要約>

本研究では、主体的な聞き手を育てるために、対話における年間を通した系統的な授業を行った。その際、「聞く力の系統表」及び中学校3年間を通した「主体的に聞く力を高めるための単元構成」を作成し、これに沿って授業を行った。単元は「帯単元」と「特設単元」とで構成した。聞くことの必然性をもたせた場の意図的な設定と継続的な学習及び自己評価による学習の振り返りにより、生徒は「聞き、考え、話し合っ

<キーワード>

(1) 中学校国語 (2) 話すこと・聞くこと (3) 対話 (4) 単元構成 (5) 自己評価

2 主題設定の理由

本教育センターでは、平成10年度から2か年にわたって、県内生徒の中学校国語に関する学習到達度調査及び教師の意識調査を行った。その結果、相手意識をもって聞く力や態度は十分には育っていないという実態が明らかになった。したがって、生徒たちは、話された内容から必要な情報を選んだり、根拠の適否を判断したりすること、また、相手の立場や気持ちを考えながら聞くこと、さらに、話された内容に対して自分の考えを積極的に返したりするなどということが十分にはできていないと考えられる。

これからの国語科の指導においては、話し手と聞き手がお互いの立場を尊重し、言葉によって伝え合い、より良い考えを見いだしていく力、すなわち、対話能力を育てることが必要である。平成10年12月に改訂された中学校学習指導要領でも、国語科の目標に「伝え合う力を高める」ことが付け加えられた。この改訂に伴い「話すこと・聞くこと」に関して「目的や方向に沿って効果的に話したり、相手の意図を考えながら聞いたりする能力を高めるようにすること」との配慮事項が明記された。氾濫する情報を単に正確に聞き取るだけでなく、内容の信頼性を判断しながら聞いて、真に役立つ情報を主体的に取捨選択し、吟味し、活用する力、さらに、聞き取った内容を基により良い考えを見いだそうとする、主体的な聞き手の育成が求められている。そして、この趣旨を達成するためには、相手意識や目的意識、状況意識をもった体験的な対話活動を系統立てて取り入れることが有効であると考えられる。聞くことの必然性をもった場を意図的・継続的に設定して学習を進めることにより、生徒の主体的に聞く力の定着を図るのである。

また、自己評価及び生徒同士の相互評価を取り入れ、自ら学習の振り返りをさせることで、学習に対して主体的に取り組む姿勢を育て、主体的に聞くことに対する意欲の向上及び学習内容の定着を図ることができる。

そこで、主体的な聞き手を育てるため、これまでの学習方法の改善に向けて、対話における系統的な学習活動について教材開発及び指導方法を研究する必要があると考え、本主題を設定した。

3 研究の目標

国語科の授業における、生徒の主体的に聞く力を高める学習指導方法の改善に向けて、具体的な方策を探る。

4 研究の仮説

国語科の「話すこと・聞くこと」の授業において、次の2つの手立てを取り入れれば、目的意識や相手意識、状況意識が高まり、主体的に聞く力が高まるであろう。

- (1) 「聞くこと」の必然性をもった対話の場の意図的、計画的な設定
- (2) ねらいに応じた自己評価票の活用

5 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 中学生の段階で身に付けさせたい「聞く力」についての研究
- イ 目的意識や相手意識、状況意識を高めるような場を取り入れた単元開発と授業実践
- ウ 自己評価を主とした評価活動の指導方法についての研究

(2) 研究の方法

- ア 「話すこと・聞くこと」の指導と評価に関する文献や先行実践の研究を行う。
- イ 質問紙法による生徒の実態調査を実施し、結果を分析して指導内容や方法を検討する。
- ウ 「聞く力」を高めるような単元及び評価の内容と方法を開発し、検証授業を行って結果を考察する。
- エ 主体的な聞き手の育成に関する研究の成果と課題を検討する。

6 研究の実際

(1) 本研究における「主体的な聞き手」

ア 対話と主体的に聞くことについて

『中学校学習指導要領 国語科』の目標に「伝え合う力を高める」ことが付け加えられた。『中学校学習指導要領解説 国語編』では中学校国語科改訂の趣旨として「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することを重点に置いて内容の改善を図った」⁽¹⁾ことが示されている。また「A話すこと・聞くこと」の観点の冒頭に「発想や認識についての指導事項」が取り上げられている。

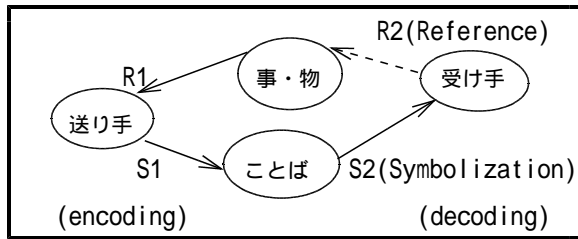
話し手のものの見方や考え方と自分自身のそれとを対比させることで新たな発見をしたり、話の根拠を確かめることによって自分の主体的な判断を確かめたりできるようにする。また、話し手の立場になって話を聞き取ったり、それを自分の立場から判断したり評価したりする能力や態度を育成することも大切である。さらに、様々な話に触れて、自分のものの見方や考え方を広めたりしていくことは、言語生活を充実させる上で重要であることを認識して、主体的に話を聞く学習を進めていくことが大切となる。⁽¹⁾

上記のように、対話は発想の認識を広げる機能がある。対話とは他者を発見することを通して、自己を認識し変容させる手段である。この「変容」を目指した主体的な聞き方を身に付けさせたい。

イ コミュニケーションの成立

高橋俊三は「コミュニケーションの成立」について次のように述べている。⁽²⁾

- ・ 4つの段階（図1）がすべて完全に行われるならば、送り手から発信された意味内容は、受け手に伝えられる。しかし、言葉は事実を完全に表すものではないために「事・物」が完全に伝わることは不可能である。
- ・ これからの音声言語指導では、内言としての非言語コミュニケーションの操作力を定着させていくことが重要である。
- ・ 音声による伝達を考えた場合、相手意識を特にもたせる必要がある。S1、S2の段階では送り手は受け手のことを考えて言葉を選ぶ。一方、受け手は相手の立場を思いやってR2を解読することが求められる。
(本研究委員会による要約)



- R 1 ...送り手が事・物を照合する段階
- S 1 ...その内容を言葉として記号化する段階
- S 2 ...記号としての言葉を感じ知し解読する段階
- R 2 ...事・物と照合して、事実として受け止める段階

図1 コミュニケーションの成立⁽²⁾

このように「聞くこと」の学習においては、内言としての非言語コミュニケーションも重視していく必要があると考えられる。言葉を正確に聞き取るのみでなく、発された言葉以外からも話し手の言いたいこと、伝えたいことを推し量る力である。このように、言葉の背後にある相手の思いをもくみ取ろうとする態度を育てたい。

ウ 「主体的に聞く」力について

「主体的」をどのようにとらえるかを考えたとき、村松賢一の次の考えが参考となろう。村松は「聞く力」として次の3段階を挙げている。「受容的な聞き方(中心点を把握したり、質問したりして、共感を表明する聞き方)」「自己照合的な聞き方(自分の経験、知識、考えと比べて聞き、納得できないことを問いただす聞き方)」「自己変容をもたらす聞き方(相手を受け入れ、自他の異同を明らかにしつつも、『変容=新たな自己との出会い』を恐れない、謙虚さと勇気を持った学び合う聞き方)」⁽³⁾である。

このことから「主体的に聞く力」とは、「相手を正しく受け入れる力」を基盤として、「相手から受け取った事柄を吟味し、自分自身の考えと照らし合わせて考える力」であり、更に「複数の考えを吟味し、聞いて返す活動を繰り返すことによって、より良い考えを見いだせる力」であると考えられる。

エ 本研究でとらえる「主体的な聞き手」

以上のことを踏まえ、本研究では「主体的な聞き手」を以下のようにとらえる。

- (ア) 相手の立場を尊重し、状況や目的を判断しながら聞くことができる聞き手
 - a 話し手の立場やその場の状況を考えながら聞くことができる。
 - b 選択された言葉、表情、音声・音調などの奥にあるものを考えながら聞くことができる。
- (イ) 話された内容に信頼性があるかどうかを判断しながら聞くことができる聞き手
 - a 話し手の先入観や主観が入っておらず信頼性があるかどうかを判断することができる。
 - b 論理の展開に矛盾がないかどうかを判断することができる。
- (ウ) 話された内容を基により良い結論を導きだすことができる聞き手
 - a 自分の考えや既にもっている情報と比べながら聞くことができる。
 - b 話された内容を基に自分の考えを補強したり修正したりすることができる。
 - c 話された内容を吟味して合意点や第三の考えを見いだすことができる。

このような聞き手を育てるために「聞くこと」や「話し合うこと」の必然性をもった対話の場を意図的・計画的に設定することにした。対話とは「対向的な関係にある者同士が共通の理解を築いていく試み」⁽⁴⁾であり、「立場の違う者同士が、その違いを乗り越えて歩み寄ろうとする決意が感じられる。異質な考え方を持つ者同士が立場を超え国を越えて相互に助け合い共存を図る、共生時代を支える能力であろう」⁽⁵⁾という意見に示されるように、上記の力を備えた生徒を育てるのに有効な音声言語活動であると考えられる。

また、意図的・計画的な学習活動及び自己評価を継続して行うことにより、学習経験及び自己内反省を繰り返し、上で述べた力が徐々に付いていくものであると考える。

そこで、「聞く力系統表」及び「主体的に聞く力を高めるための単元構成」表を作成し、それらに沿った授業を実践して、検証することにした。

(2) 聞く力系統表

	1 年	2 年	3 年
A 受 容	1 相手が話しやすい雰囲気工夫する 2 相手意識, 目的意識, 場面や状況意識を常にもちながら聞く 3 話を促しながら聞く		
	(動作) ・うなづく ・相づちを打つ ・手をたたく ・身を乗り出す	(表情) ・ほほえむ	(視線) ・話し手を見る (態度) ・話を最後まで聞く ・話するときには相手に許可を得る
B 理 解 (聞 き 取 る)	1 話し手の意図や根拠を考えたり確かめたりしながら聞く 2 話し手の表情や音声, 音調に着目し, 気持ちを考えながら聞く 3 資料や例示の活用と工夫に着目し, その効果について考えながら聞く 4 事実と意見の関係に着目して聞く 5 相手の話したいと思っている内容を正確に聞く 6 話し手が話さなかったことを考えたり確かめたりしながら聞く 7 話の全体と部分の関係に注意して聞く 8 言葉の選び方の工夫に着目して聞く 9 話の展開の工夫やその効果に着目して聞く 10 複数の意見を聞き分け, 自分の考えと比べながら聞く 11 意見の妥当性や状況を判断しながら聞く		
	6 話し手が話せなかったことの背後にあるものと考えながら聞く 7 話の中心の部分と付加的な部分の関係に着目して聞く 8 話の内容に応じた語句の選択や説得力のある表現の工夫に着目して聞く 9 話の論理的な構成や展開を考えながら聞く 10 複数の話し手の話を整理しながら聞く 11 既にもっている情報との関連を考えながら聞く 12 意見を支える根拠の信頼性を判断しながら聞く		
M モ	相手, 目的, 話題や内容, 場や状況によって, メモを取る方法や時期を工夫する 1 枠囲みや記号等を工夫してメモを取る 2 キーワード等をとらえ, 簡潔にメモを取る 3 話の中心となる話題をとらえてメモを取る 4 話のまとまりごとに要点をとらえてメモを取る 5 必要な情報を選んでメモを取る 6 事実と意見との関係が分かるようにメモを取る 7 話し手の立場や考え方を聞き分けてメモを取る 8 自分の考えや意見を書き添える 9 メモが有効に活用できるように整理し, 保存する		
C 発 信 (聞 き 返 す / 話 し 合 う)	1 必要な情報を聞き出す 2 話された内容に対して質問等をして, 更に情報を得る 3 話された内容以外の情報を更に得る 4 判断や意見の根拠や理由を確かめる 5 相手の意見を注意して聞き, 自分の意見を返す 6 話合いの話題や方向をとらえてそれぞれの発言を聞き分け, 自分の考えを表出する 7 話された内容を基に, 自分の考えを補強したり修正したりしてまとめる 8 話された内容を吟味し, 合意点を見いだす		
	(動作) ・首をかしげる ・身振り手振りを交える ・腕を組む	(表情) ・真剣な顔をする ・眉をしかめる	(視線) ・話し手の仕草を見る ・話し手の表情を見る (態度) ・相手の発言を受けて自分の考えを述べる ・複数の意見を公平に聞く

参考: 『中学校学習指導要領国語科』の「指導内容」⁽¹⁾

『音声言語大辞典(高橋俊三編 明治図書 1999.4)』の「聞くこと」能力表及び「話し合うこと」能力表⁽²⁾

『いま求められるコミュニケーション能力(村松賢一著 明治図書 2001.4)』の

「中学校を卒業するまでにどのような能力、態度、知識を身に付けばよいか」⁽³⁾

『聞く力を育て生かす国語教室(森久保安美著 明治図書 1996.)』の「聞く力のあらまし」⁽⁶⁾

「聞く力」とは, 話し手の考えを, まず「受容」し, 次に「理解」して, その上で自分の考えの「発信」へと進むものであると考え, 上記の文献を参考にして, 中学校における「聞く力系統表」を作成した。

「主体的に聞く」力を高めるための「対話」においては, 相手の発言をきちんと聞いて受け止め, 自分の意見を投げ返す力の育成が必要である。そこで, 中学生における「聞く力系統表」では, 「B理解(聞き取る)」の力とともに「C発信(聞き返す/話し合う)」の力の育成を重視した。

なお, 検証授業では, この「聞く力系統表」を評価の観点として, 学習目標及び評価票の評価項目の設定をしている。

(3) 主体的に聞く力を高めるための単元構成

< 帯単元 >				
	題材名	回・時数	指導目標	学年 系統
a	口の体操	3分×5	言葉を相手に正確に伝えるための基本的な力である正しい発音・発声の仕方を心掛けさせる。	A-1
b	聴写	5分×8	聞くことの基礎的・基本的な力である聴写力を育て、正確に聞く態度を身に付けさせる。 ア すべて正確に聴写 イ キーワードをとらえてメモ	B-1 6 イ: ㄨㄝ-2
c	1分スピーチ	1時間+ 10分×5	話し手の言葉の選び方に着目して聞くとともに、話し手の気持ちをとらえる力を育てる。	B-2 8
d	キャッチコピーづくり	15分×1	目的意識をもってスピーチを聞き、聞き取った内容を要約する力を育てる。	1年 B-6
e	インタビューでどんな言葉が選ばれた	10分×1	相手意識をもち、言葉を選んでインタビューすることが、相手の言いたい事柄を引き出すことにつながることを理解させる。	C-1
f	一文リレー	10分×3	相手の話を正しく聞き取り自分の言葉を相手に正確に伝える力を育てる。	A-2
g	他者紹介	10分×8	内容を第三者に伝えるために正しく聞き取ることの必要性を理解させ、聞き取った内容を工夫して伝える力を育てる	C-1
h	半分スピーチ	10分×8	相手の話さなかった内容も、話した内容を基に聞き出すことができれば、会話がより深まるということを理解させる。	C-1 2
i	司会力推進	10分×8	司会者として複数の意見をまとめたり、質問したり、発言を促したりすることにより、話し合いが深まることを理解させ、司会力を育てる。	A-3,C-2 2,3年 B-10
< 特設単元 / 投げ入れ教材 >				
	題材名	時数	指導目標	学年 系統
1	公共施設に電話しよう	1	アポイントを取る体験を通して、公的なコミュニケーションの取り方を理解させる。	B-6 C-1
2	登場人物の本当の姿は	3	登場人物への複数の読み取り方についての代表者討論を聞くことにより、複数の意見を聞き分けて情報とし、自分の考えを確立する力を育てる。 (文学的文章の読解後に発展として実施)	C-4 6 7
3	言葉の背後にあるもの	1	相手の立場を理解し、言葉の背後にあるものを理解して対応することも、時として必要であることを理解させる。	B-1,2 1年B-6
4	語れない思いを考えて聞こう	1	相手の立場や状況を理解し、言葉にできない思いを想像しながら話を聞くことの大切さを理解させ、相手の思いを尊重する態度を育てる。	B-2 2,3年B-6
5	筆者の意見に賛同するか反対か	3	読み取った筆者の主張への賛否両論を戦わせることにより、他者の考えを聞いて、反論したり自分の考えを深めたりする力を育てる。 (説明的文章の読解後に発展として実施)	C-4 2,3年 C-5,6,7
6	根拠をもって意見を戦わせよう	5	論題に対して反対・賛成に分かれ、収集した情報を活用して議論し、他者の意見を吟味することにより、考えを広げたり深めたりする力を育てる。	C-4 2,3年 C-7,8

聞くことの必然性をもたせた場の意図的・計画的な設定として、「聞く力系統表」を基に中学校3年間の単元を構成した。それが上記の表である。平成12,13年度はこの表に沿って検証授業を行った。

第1学年は帯単元を充実させて、聞くことの必然性をもたせた場を数多く設定し、関心・意欲を高めることから始める。そこで、第1学年の帯単元b, fは表に記入した回数よりも多く実施した。

第2学年から、特設単元で「聞くこと」及び「聞いて返すこと(話し合うこと)」の学習を充実させる。村松は、今求められる能力として「話し合いを通じて考え方が異なる相手と問題を共有し、より良い解決策を生み出すコミュニケーション能力」⁽³⁾を挙げている。この「聞いて自分自身の考えをもち、それを相手に返して更に考えることができる」聞き手のことを「主体的な聞き手」ととらえる。また、「中学校学習指導要領 国語」の「話すこと・聞くこと」の内容はア, イ, ウ共に「～話したり, ～聞き取ったりすること」となっており、「話す・聞く」が一体となっている。そこで、特設単元では「聞いて話すこと」や「話し合うこと」を念頭に置いた「聞く力」の学習とした。

第3学年では、帯単元とともに、第2学年と同じ特設単元を繰り返す。そのときには論題等を第3学年にふさわしく工夫することにする。

(4) 評価票

良き話し手、聞き手を目指そうとする意識を主体的にもたせるためには、自己評価能力の育成が有効であると考え。自己評価が適正にできるようになれば、自らの聞き方・話し方を客観的に見つめることができるようになる。また、相互評価を併せて活動に位置付けると、友人との比較や友人からの指摘も自分自身を振り返る視点となり、課題意識や意欲も生まれよう。「こうした評価を活用することによって、子供の意識を自分の言語生活に向けさせ、自覚的な学習活動を促すことが、強く求められています」⁽⁶⁾という意見に示されるように、これからの学習活動には必要な能力であると考え。

そこで、上記の単元学習を行うに当たって、めあてに沿った自己評価票を使用することにした。評価項目については「聞く力系統表」を基にしている。また、活動によっては当事者は聞き手に徹し、友人の話合い活動の「話し方・聞き方」を評価する相互評価（モニター評価）も取り入れた。

評価票には本時の学習目標のほかに、各自で前時の自己評価等を基に「私の目標」を立てさせ、意欲の喚起を図る。また、授業終了後の満足度や目標達成度を記入させて、生徒の意識を見ることにした。参考に挙げる評価票の実際は「(5)授業の実際」に提示する。

なお、自己評価では生徒の情意面をとらえ、自由記述欄で学習内容の理解度を見るようにした。

(5) 授業の実際

ア 一文リレー〈帯単元 f〉（平成12年度、第1・2学年で実施、71名）

(ア) 主な学習・指導過程（10分×3回）

主な学習活動	形態	指導上の留意点及び支援
1 学習の仕方を学ぶ。	一斉	自分の言葉が相手に正確に伝わるよう工夫させる。
2 課題を知る。 (例) 平安時代には、チンチロリンと鳴くのが鈴虫で、リーンリーンと鳴くのが松虫でした。	一斉	課題は教育漢字の範囲内とし、常識の範囲で聞くと間違えやすい内容とする。 指導者は紙に書いた課題を最初の生徒に提示する。
3 グループで伝え合う。	G	生徒は席順で課題を伝えていく。
4 自分の聞き方・話し方を振り返る。	個	振り返った内容を基に、うまく相手に伝えるにはどうしたらよいかを自己評価票に記入させる。

(イ) 授業の考察

右図は記入された工夫点を類型化したものである（回答者71名、複数回答あり）。回答 ~ からは、相手意識をもって話したり聞いたりすることの大切さを実感し、工夫しようとする態度を見ることが出来る。事前調査では「工夫はあまり必要でない」と回答した生徒は9名だが、事後は全員が何らかの工夫点を回答した。これも必要性を実感したからであろう。

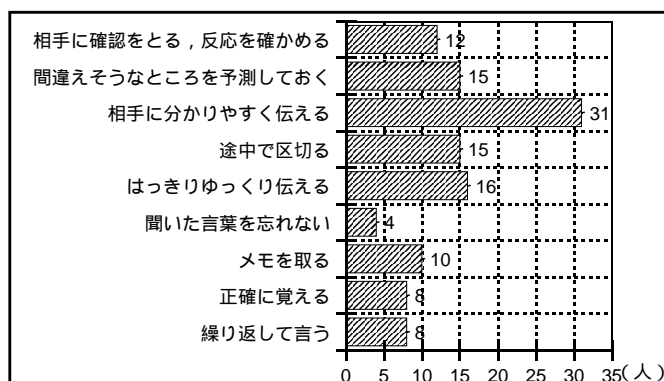


図2 一文リレーで相手に伝えるときの工夫点

イ 語れない思いを考えて聞こう - おばあさんの語れない思い - 〈特設単元 4〉

（平成12年度、第2学年2学期に実施、36名 及び 平成13年度、第2学年1学期に実施、112名）

(ア) 指導目標

相手の立場や状況を理解し、言葉にできない思いを想像しながら話を聞くことの大切さを理解させ、相手の思いを尊重する態度を育てる。

(イ) 検証の視点

・非言語活動に着目し、相手の気持ちに寄り添いながら聞く活動が組めたか。

(ウ) 主な学習・指導過程（1時間）

主な学習活動	形態	指導上の留意点及び支援
1 本時の目標と活動内容を知る。	一斉	「正確に聞く」のみでなく「言葉にできない思いを聞き取る」ことの重要性を考えさせる。
2 老婦人が戦争体験を語るVTRを視聴する。 何がどう語られているのか。 ヒロシマで原爆にあったときの様子 ・自分のこと ・近所の様子 語れない思いを想像する。 小学生だった我が子の死体を見つけたが、道端に置き去りにして逃げなければならなかったことを語る場面	個	VTRは老婦人が言いよどむシーンまで（15分程度）を視聴させる。 語られている内容をメモさせる。 語ろうとして語れない心情を察し、その語れない中にも何を伝えようとしているのかを想像してメモさせる。
3 老婦人が言えなかった内容を話し合う。	一斉	根拠を明らかにさせながら考えたことを話し合わせる。
4 自分の聞き方を振り返る。	個	今まで気付かなかった視点について記入させる。

(I) 本時のワークシート（実物はA4版）

2年 組 号 ()
1 教材名 語れない思いを考えて聞こう - おばあさんの語れない思い -
2 VTRを見て聞き取った内容をメモしなさい。
3 VTRの中でおばあさんが言いよどんだシーンがありました。言えなかったのはどんな言葉だったと思いますか。想像してみましょう。（根拠をはっきりと書くこと） 自分で考えたこと 他の人の意見を聞いてなるほどと思ったこと
4 今日の学習を通して、聞くことに関して考えたことを書いておきましょう。

(オ) 授業の考察

図3は、生徒がワークシートに記入した「学習を通して、聞くことに関して考えたこと」を類型化したものである（平成12年実施分36名）。話を聞くときに「表情や音調」といった非言語活動に着目できた生徒は14名である。また、「一番言いたいことを考える」と聞いた内容以上のものを推し量ろうとする生徒が10名である。さらに、「相手の気持ちになる」「言いよどんだ部分を考える」などの回答から、生徒たちは相手の気持ちに寄り添いながら聞くことの必要性を感じ、工夫することができたと考える。

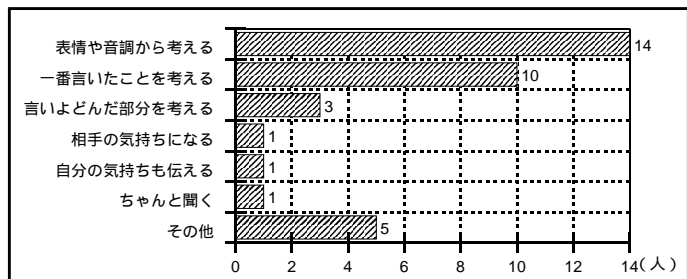


図3 語れない思いを考えるには

この授業は平成13年度にも実施した。ここでは「目と目を合わせ、心から相手の話を聞く」という回答があった。生徒たちは「目を見て聞く」ことの必要性を礼儀として受け取っていたが、この授業で、話し手の気持ちは表情からも分かることを実感し、表情やしぐさから、言うに言えない話し手の心の声をくみ取ろうとすることができた。これは、老婦人の言いたいことを想像するに当たって根拠を求めた結果、しぐさや表情に気付いたためであると思われる。また、老婦人が言いよどんだ部分を考えていくうちに「『間』にはその人の言葉にならない気持ちが入っている」ことに気付いた生徒もいた。「間」は息継ぎのみでなく、気持ちを伝える大切な要素の一つであることを理解したとすることができよう。

以上のことから、この授業で生徒たちは、「非言語コミュニケーションの重要性」を感じ取ることが

でき、「言葉には表れない内容も、表情やしぐさを手掛かりに相手の心情をくんで、考えようとする態度」、さらに「聞く活動を通して相手を理解しようとする態度」を育てることができたと見えよう。

ウ 根拠を基に意見を戦わせよう - 狂牛病 - <特設単元6より第4次の授業>

(平成13年度, 第2学年で実施, 107名)

(ア) 指導目標

収集した情報を活用して議論し、他者の意見を吟味することにより、考えを広げたり深めたりする力を育てる。

(イ) 検証の視点

- ・相手の発言内容を吟味して自分の考えを返す活動が組めたか。
- ・話し合い活動は生徒個々の考えを広めたり深めたりする上で有効であったか。
- ・自己評価票は生徒の意欲・関心を高め、次時の目標をもたせる上で有効であったか。

(ウ) 主な学習・指導過程(全5時間)

	主な学習活動	形態	指導上の留意点及び支援
	資料を基にテーマについて共通理解した上で、自分自身の考えをもつ。(1時間)		
第1次	1 狂牛病に対する現在の考えを確かめ、記述する。	個	話し合い活動を進めるには、まずテーマについての共通理解と正しい知識が必要であることを知らせる。 指導者の用意したインターネットからの資料を共通資料とする。 資料を読む前と後との意識の違いを見る。 牛肉に対する抵抗のあるなしでグループを作る。次時からはこのグループで活動することを知らせる。
	2 資料を読み狂牛病に対しての知識をもつ。	一斉	
	3 牛肉についての現在の考えを再度記述する。	個	
	情報収集をし、グループとしての論題に対する考えを発表する準備をする。(2時間+家庭学習)		
第2次	1 資料収集方法をグループで話し合う。	G	授業中にすることと家庭学習として個人であることを区別して計画を立てさせる。 資料はインターネット、図書資料、新聞、町広報誌、パンフレット、インタビュー、アンケート等で工夫して集めることとし、役割分担をさせる。 班で話し合い、根拠が適切であるかを検討しながら、意見をまとめさせる。全員に「聞いて返す」活動ができるよう班の司会者に配慮させる。
	2 資料を収集する。 (含:家庭学習)	G+個	
	3 収集した資料を使い、狂牛病や牛肉に対する考えや、相手方への反論等を班でまとめる。	G	
	代表グループによるディベート形式の討論をする。(1時間)		
第3次	1 代表グループによる討論を行う 意見の陳述 質疑応答 反論	一斉	各1班を代表選出し、討論させる。その他はフロアーとして、自分たちの資料や根拠、自分自身の考えと比べたり、反論や援護の意見を考えたりしながら聞くことに徹するよう指示する。 ディベート形式を応用するが、判定はしない。
	前時の代表討論を受けて全体でのディスカッションをして、考えを深める。(1時間)《本時》		
第4次	1 代表もフロアーも同等とした全体での討論を行う。	一斉	資料を基に、根拠をもって考えを述べるよう指示する。 思い付いた考えは、まず班内での話し合いによって適否を確認した上で全体へ発言するよう指示する。 話し合いを通して自分の考えがどう変わったか、また、より良い考えを見いだせたかどうかを自己評価する。
	2 最終的な考えを確認する。	個	

(イ) 本時の目標

- ・討論をすることにより、自他の意見を比べ、根拠のある反論や賛成意見をもつことができる。
- ・話し合いの内容を吟味して、より深められた考えをもつことができる。

(オ) 本時の展開(第4次:5/5時)

	主な学習活動	形態	指導上の留意点と支援
導入	1 学習目標を知る。	一斉	討論をすることにより、自分の意見と他の人の意見を比べながら、狂牛病について、考えを深めていくことを知らせる。 前時の自己評価を基に個人目標を立てさせる。 前時の討論の流れと出てきた意見、根拠となった資料について確認する。
	2 個人目標を立てる。	個	
	3 前時の討論内容を確認する。	一斉	
展開	4 各班の狂牛病に対する考えとその根拠を発表する。	一斉	全体の司会者は生徒の中から出し、指導者は適宜助言する。 まず班内での発言内容や根拠の適否を話し合い、確認した上で全体に発表し、討論を進めるよう指示する。 班内での話し合いにおいて班員全員が「聞いて返す」活動ができるように班の司会者に配慮させる。
	5 各班の発表に対しての質問や反論を出し合い、討論を進める。	G	

ま と め	6 学習を振り返り評価票を記入する。 7 モニタリングした相手に評価を知らせ合う。	個 G	話し合い活動の反省を自己評価させ、話し合いの内容と自己の考えの変容を自由記述欄に記入させる。 相互評価を見せ合って評価の説明をさせ、その後学習の達成度や話し合いの満足度を記入させる。
-------------	--	------------	--

(カ) 本時の評価票 (5 / 5 時) (実物は B 4 版)

今日の目標	討論をして、他人の考えと自分の考えを比べながら、より深く考える。		※話し合いの内容はどうか。 ※この話し合いでわかったこと、考えたこと (自分の考えに影響したか)
自分の目標	自分のできるがぎりなくしてもらいたい意見		<p>M君のいた、マズメ病の新薬のことはアメリカで 開発された。日本にマズメ病の新薬があるのはわか らないうし、あなたとしてもお金ばかりで、お金のいんもい んがもたれないし、それで、苦しむ人もで、くろがまし れい、の、目、力、から、狂牛病に抵抗し、お金の い、と思、う。 T君の一番最後、いた意見は とてもな、く、ま、した。ま、ご、ら、た、肯定派の人は、 生動物と、食べ物、の話は、が、り、ま、る、て、い、た、狂牛病に 抵抗、が、ない、の、ら、狂牛病の牛の商品を食、べ、たり 使、な、ら、な、い、だ、ら、あ、ら、う、か、 今日の私は (44) % 目標を達成しました。</p>
モニター評価	ま、い、う		
1	納得できる内容の意見を述べている。	A B <input checked="" type="radio"/> C D	
2	必要な情報を選んですばやくメモしている。	<input checked="" type="radio"/> A B C D	
3	相手の意見をきちんと受け止め、根拠を持って自分の意見を返している。	<input checked="" type="radio"/> A B C D	
4	相手を見て、相手の表情や態度に反応している。	A <input checked="" type="radio"/> B C D	
自己評価 (自分自身の話し合いへの参加状態)			話し合いの満足度 (理由) 今日は自分なりに満足できた。 (意見をたじたがら) <input checked="" type="radio"/> B C D みんなもしい意見さ、い、て、い、た、。
1	持っている情報との関連を考えながら聞く。	A <input checked="" type="radio"/> B C D	
2	相手の根拠が信頼できるか考えながら聞く。	<input checked="" type="radio"/> A B C D	
3	必要な情報を選んですばやくメモする。	A B <input checked="" type="radio"/> C D	
4	相手の意見をきちんと受け止め、根拠をもって自分の意見を返す。	<input checked="" type="radio"/> A B C D	
5	話された内容を吟味し、より深く考える。	A <input checked="" type="radio"/> B C D	
6	モニタリングする相手の状態を公正に判断・評価する。	A B <input checked="" type="radio"/> C D	

(キ) 授業の考察

この時間は、全員が「聞いて返す」活動に取り組むために、班での話し合いを経て全体へと発言する活動を組んだ。このため、全体への発言ができない生徒も班内では「聞いて返す」ことができた。また、初めから個人の意見を募ったクラスよりも自主的な挙手が圧倒的に多かった。これは班内での賛成を得られた自信からであると思われる。さらに、発表者以外の者も班内での話し合いを経た意見を自分のものとしてとらえ、その意見にどのような反論や援護がくるかを興味をもって聞き、再度意見を返そうと、すぐに班の話し合いに移る姿勢が顕著であった。

討論が進むにつれて、「これだけ多くの食品にビーフエキスが使われているのに、あなたはすべて食べないつもりなのか」という発言があり、賛同意見が多く出た。この時、ある生徒が「さっきから食べる食べないの話になっているが、これは今日の話し合いの内容とは違う。もっと考えて意見を言おう。」と発言し、軌道修正を行った。批判的に聞いて考える力の一つの現れであると言える。

討論を進める中で、生徒たちは、違う立場の意見を聞くことによって自分の考えを再考する機会をもてた。また、討論の中で同じ資料を使っても正反対の解釈があるということに気付いた。評価票にも、自分の考えの変容とそのきっかけとなった友人の意見を記述できた生徒が多くなった。これは、ディベート形式のみの話し合いでなく、その後に全体討論を組んだことが有効であったと思われる。

話し合い活動を評価する方法として次の2点を利用した。1点目は生徒の関心・意欲を見るための自己評価及び相互評価であり、2点目は生徒の理解度を見るための自由記述である。毎時間めあてに沿った評価票を書かせ、相互評価はその場で見せ合った。その後指導者がコメントを書いて次時の始まる前に返却した。生徒にはコメントと前時の自己評価とを個人目標を立てる際の参考にさせた。生徒

は評価項目によって付けるべき力を認識した。そして、自由記述欄に話合いの内容を記述し、自分の考えを記す活動を繰り返すことによって、より良く聞こうという意識が定着していった。

(6) 生徒の変容

「主体的に聞く力を高めるための単元構成」の指導計画に基づいて授業を実施した結果、発言のほとんどなかった生徒たちと、発言は多いが他人の意見をあまり聞かなかった生徒たちの両方に大きな変容が見られた。前者は発言ができるようになったのだが、後者は発言回数が減った。これは、自分の発言が妥当であるかを自省するようになったことと、周囲の生徒たちが、彼らの発言をただ受け入れるだけでなく、きちんと聞いて吟味し、意見や反論を返すようになった結果であると思われる。

図4は特設単元5、6の評価票における生徒の記述の変容を追ったものである。生徒は、特設単元5では話合いの感想を書くにとどまっていたが、特設単元6の第4時では、話合いの内容を思い返し、自分の考えを書くことができた。ただし、自己を変容させるに至った友人の意見がないのは残念である。しかし、第5時では友人の発言を吟味した内容を記述することができるようになった。

生徒は、特設単元5で既に、友人の意見と自分の考えの変容を記述できる力があるが、特設単元6では、意見をそのまま受容するのではなく、出された意見の論理的な不足を感じ、自分なりに考えを進めようとしている。残念なことに最終の授業では、よりよい考えを模索しつつも、終わりの時間が迫ったせいで、むりやり自分を納得させようとしてしまった。

いずれにしても、生徒は、共に考えの深化が認められる。これは、主体的に聞く場の設定とともに、評価票への記述によって内容の理解及び聞く力の定着が図られたものであると考えられる。

	<特設単元5 3/3時>	<特設単元6 4/5時>	<特設単元6 5/5時>
生徒	<p>僕はこの話合いで、人と意見が違ったときの話合いの仕方として様々なことを学び、とてもいい勉強になったし、人の意見を聞いて、たしかにそうだなとなっとくしたりしてとてもいい勉強だと思った。</p> <p>(話合いの感想のみ)</p>	<p>みんなちゃんと集中して聞いてよかったし、意見がちゃんと言えてよかった。狂牛病はきけんだと思います。明日の討論では意見を変えて抵抗があるグループに入りたいと思いました。</p> <p>(変容した自分の考え)</p>	<p>今日の話合いは昨日よりとてもよかったのでけっこう満足したけど、最後のM君の外国の薬を使えば大丈夫だという意見に、完全に直るかとか、もし効果がなかったらとか、アメリカはテロで大変だから高かったらとかの不安も残った。</p> <p>(友人の発言を吟味)</p>
生徒	<p>「外国に行く必要がない人はまなざしを強化しなくてもいい」と思ってたけど、K君の「これからの社会は世界の国々との深いつながりができていく」という意見で世界の人と対等につきあうには必要なのだなあと、この考えに変わった。</p> <p>(友人の意見による考えの変容)</p>	<p>どちらも100%っていう確信がないので肯定・否定も分からなくなった。安全が100%、危険が100%なんて言えないのだなあと、みんなの意見を聞いて思った。考えがまとまらず、発表できなかった。明日は考えが変わるかもしれない。</p> <p>(発言を吟味し、第三の考えを模索)</p>	<p>狂牛病にかかる確率が低いということは分かったが、かからない、かかっていないとも言えないと思う。「新薬」だってアメリカの少人数には適応したとしても日本でも適応するとは限らないと思う。でも、結果的に普通に過ごしていれば安全なのかなと肯定派にも入る形となった。</p> <p>(発言を吟味し、引き続き考えを模索)</p>

図4 「話合いで得たこと」の記述内容の変容

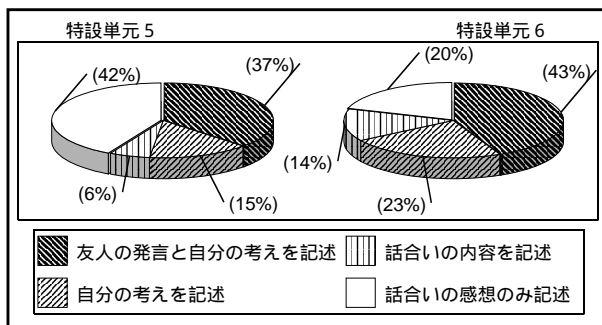


図5 自由記述欄の記述内容

図5は特設単元5の3/3時と特設単元6の5/5時での自己評価票の自由記述欄に記述された内容を類型化したものである(回答者107名)。特設単元5で既に半数以上の生徒が、話合いの内容をまとめたり、自分自身の考えをまとめたりすることができているが、特設単元6ではその数が更に増加している。

また自己評価票を見ると、70%以上の目標達成度を感じた生徒は、特設単元6の5/5時では71%おり、話合

いの満足度がA評価だった生徒は69%いた。Aの理由は「良い意見が多数出た」「自分の考えを発表できた」等であり、B以下の理由は「考えを言えなかった」「考えをまとめられなかった」等であった。

(7) 聞くことに関する意識調査結果

ア 生徒自身がとらえた「聞く力」 <平成13年12月実施(107名)>

図6は、平成13年12月に行った最終アンケートの結果である。3/4の生徒が「聞く力」の学習の達成感をもつことができた。

表1は、生徒自身が付いたと思う力の上位を示した。「聞く」だけでなく、「聞いて考える」力が意識され、育成されていることが分かる。

これらのほかに「相手の気持ちを考えるようになった」という回答があり、言葉の奥にある話し手の気持ちをとらえようとする姿勢もうかがわれた。

また、「いいえ」と回答した生徒の理由も「考える力の不足」「まとめる力の不足」「考えを言えない」などであり、ほとんどの生徒が、主体的に聞いて考えを返すことのできる力の必要性を認めている。

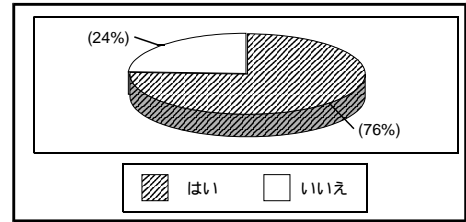


図6 昨年より聞く力は付いたか

表1 どのような力が付いたか (人)

自分の考えをもつことができるようになった	19
自分の考えと比較して考えるようになった	15
発言に対して自分の考えを返せるようになった	11
話し手の伝えたいことが分かってきた	11
自分の考えを振り返り、考え直すようになった	6
話されたことの内容を吟味するようになった	6

イ 状況によって気を付けること(複数回答あり) <□:平成13年7月実施(112名) ■:平成13年12月実施(107名)>

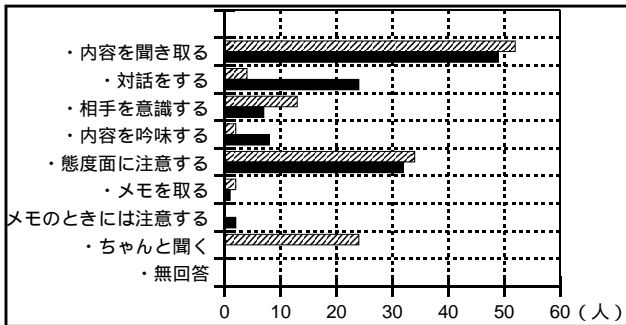


図7 友人の話を書くとき気を付けること

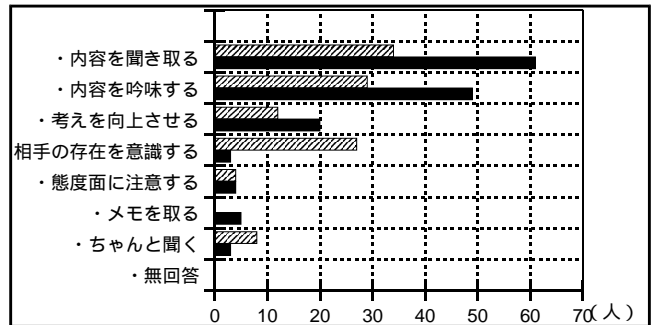


図8 異なる意見を聞くとき気を付けること

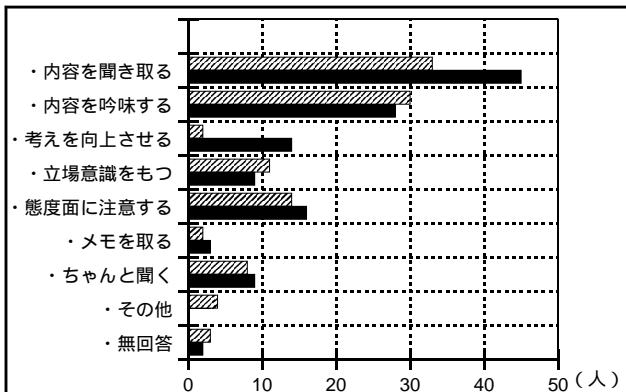


図9 他クラス代表の意見を聞くとき気を付けること

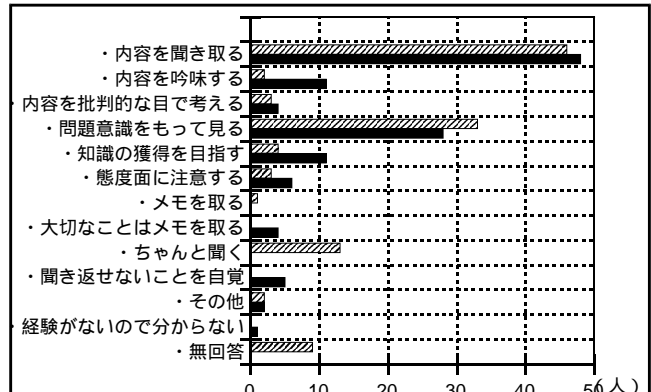


図10 報道番組を視聴するとき気を付けること

設問 から まで、聞く相手との距離が徐々に広がり、パブリック性が徐々に高まるように問いを設けたのであるが、すべて平成13年12月実施分の回答の方がより具体的であり、複数回答が増えた。図7では対話意識と内容吟味の必要性が増加している。図8では学習活動の経験からか回答数がより多くなり、「相手の存在を意識する(無視せず聞く等)」から内容理解、内容吟味、考えの向上へと、より内容に目を向けることができている。図9では考えの向上が顕著に伸びている。これは話し合いでより良い考えを見いだそうとする意識である。図10では、12月の調査では特設単元6で資料収集を行ったことが反

映された。ここで「聞き返せないということを自覚して聞く」という回答が初めて出てきた。単に「メモをする」から「大切なことはメモをする」と変わった回答とともに、想像が具体化し、状況意識が出ている。全体的に「ちゃんと聞く」という曖昧な回答及び無回答が減少しており、自分なりに状況を意識して気を付けるべきことを考え出している。

以上のことにより、生徒たちは「聞く活動を具体的にとらえることができている」「相手意識や状況意識は向上している」「内容を吟味したり、より良い考えへと向上しようとする意識が育っている」と言うことができよう。

7 研究のまとめと課題

(1) 研究のまとめ

ア 「聞くこと」の必然性を感じるような対話の場の意図的・計画的な設定について

「聞く力系統表」に基づいた「主体的に聞く力を高めるための学習活動構成」の指導計画に沿って2年間の授業を継続した結果、生徒は目的意識や相手意識を高め、また、状況に応じた聞き方を考えながら、自己の考えをもつようになった。生徒の「聞くこと」に対する意識が連続するように帯単元と特設単元を併用し、途切れず学習活動を組んだことが有効であったと思われる。

イ ねらいに応じた自己評価票の活用について

「聞く力系統表」に基づき、活動ごとに項目を工夫した評価票を使用した。評価項目により生徒にはその時間に付けるべき力が分かる。また、相互評価を取り入れることにより客観的な評価を得、その結果も次時への目標となった。さらに、自由記述により、学習内容の復習、理解へとつながった。

学習の達成度を%で記入させたが、36%などと細かく測っており、それぞれの学習達成に対するこだわりが感じられた。話合いの満足度は学習が進むにつれて上がる傾向にあった。

(2) 今後の課題

ア 題材の開発

話合いを深めるために発達段階に合わせた題材の工夫が不可欠である。「聞く力系統表」にある「より良い考えを見いだす」の項目であるが、意識は育ったが見いだす力の育成までには至らなかった。

イ 評価票の工夫

評価項目及び記述部分でどのような力を評価するかというような評価票に対する考え方や、評価票の形式の工夫等について、なお一層の研究が必要である。

《研究委員》

井手ゆずら	佐賀県教育センター研修員	平成13年度
石橋 道秀	佐賀県教育センター研修員	平成12年度
藤瀬 裕子	小城町立小城中学校教諭	平成12年度～13年度
濱 隆朗	唐津市立第五中学校教諭	平成12年度

《引用文献》

- (1) 文部省 『中学校学習指導要領解説 国語編』 平成11年 東京書籍 p2, p23
- (2) 高橋 俊三 『音声言語大辞典』 1999年 明治図書 p18, pp24-25
- (3) 村松 賢一 『いま求められるコミュニケーション能力』 2001年 明治図書 p17, p51, pp121-123
- (4) 村松 賢一 『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習 - 理論と実践 - 』 2001年 明治図書 p44
- (5) 福岡教育大学国語科・福岡教育大学附属中学校 『共生時代の対話能力を育てる国語教育』 1997年 明治図書 p14
- (6) 森久保安美 『聞く力を育て生かす国語教育』 1996年 明治図書 pp18-19
- (7) 尾木 和英 『評価で変わる国語の授業』 2001年 三省堂 p147

《参考文献》

- ・ 高木まさき 『「他者」を発見する国語の授業』 2001年 大修館書店
- ・ 植西 浩一 『国語科自己評価法の開発』 1997年 明治図書
- ・ 鷲田 清一 『「聴く」ことの力 - 臨床哲学試論』 1999年 TBSブリタニカ